

特集

## 東日本大震災10年

～私たちは忘れないあの日のことあの人のこと…いまだからこそつながる～



## 第5回花まつりデザイン募集

応募締切  
2021年  
9月30日(木)  
まで  
※当日消印有効

### 募集要項



第1回ポスター大賞作品



第2回ポスター大賞作品



第3回ポスター大賞作品



第4回ポスター大賞作品

#### 応募資格

プロ・アマチュア問わず、すべての方に応募いただけます。  
(ただし、作品採用の場合、修正や転用に依られること)

#### 応募条件

未発表のオリジナル作品で、仏教行事である「花まつり」を題材として自由に作品を描いてください。なお、作品に文字は入れないでください。  
(例: お釈迦さまに甘茶をかける場面、ご誕生をお祝いする場面、寺院の行事やイベントの場面など)

#### 作品規定

素材・画材・技法は自由(デジタル作品も可)、立体物は不可  
応募する作品は、下記のサイズを参考に制作してください。(複数応募可)

#### ●募集作品サイズ●

用紙: A3サイズ以上(297mm×420mm以上)  
デジタル: 300dpi以上(15MB以上、5000×7000ピクセル以上)

#### 審査方法

10月に審査会を開催し、大賞作品には主催者より連絡します。  
審査に関しての電話やメールでの問い合わせはご遠慮ください。

#### 応募方法

本会webサイトより応募用紙をダウンロードし必要事項を明記の上、1作品につき1部同封してください。作品は折り曲げずに(筒状は可)郵送してください。  
(デジタル作品もカラー出力後、郵送にて受付となります。)

#### 作品送付先・お問い合わせ

公益財団法人 全日本仏教会 広報文化部  
〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館2階  
TEL:03-3437-9275 FAX:03-3437-3260

全日本仏教会

検索

<http://www.jbf.ne.jp>

発行人 木全和博  
発行所 公益財団法人 全日本仏教会  
〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館2階  
TEL:03-3437-9275 FAX:03-3437-3260  
e-mail: info@jbf.ne.jp





**特集** 東日本大震災10年  
～私たちは忘れない あの日のこと あの人のこと… いまだからこそつながる～

2021年3月11日。東日本大震災から10年をむかえました。  
被災された皆さまには、10年の年月を長く感じる方も、短く感じる方もいらっしゃると思います。なかには、その日から時間が止まってしまった方もいらっしゃるのではないのでしょうか。10年という節目を迎えたいま、仏教界では、被災された方や犠牲になられた方、大切な人を亡くされた方、震災の被害により苦しみを負われた方々に想いを巡らせて、祈り、追悼し、コロナ禍にあっても忘れないという気持ちを東北に届けるために、エールを送る企画を進めてきました。

およそ1万6000名もの尊い命を奪い去った未曾有の災害について忘れることなく、犠牲になられた方々を弔い、被災された方々のところに寄り添い続けることは、私たち仏教者の務めであります。いまなお、およそ2500名の方が行方不明であり、原発の影響で10年経っても故郷に帰ることができない方もおられます。大切な人や故郷の突然の喪失によって長期の悲嘆を抱える方々は多く、10年という月日が経過しても震災は終わっていません。

新型コロナウイルス感染症の影響で、被災地での追悼や慰霊供養の行事も縮小傾向にあります。全日本仏教会では、仙台仏教会主催の「東日本大震災10年慰霊供養」を協賛し、その様子をオンラインで社会に広く発信いたしました。また、被災地をはじめ、全日本仏教会加盟の各寺院に呼びかけて、11日当日、地震発生時刻の午後2時46分にはこころをひとつに被災地と被災された皆さまへの祈りを捧げました。

またこの機会に、これまでの10年間に現地での支援やボランティアにあっていた方々や、仏縁者の方々のメッセージを集め、私たちのこころは共にあり、忘れないという想いを届けます。そして、被災3県の仏教者や関係者の皆さまにも、この10年間の想いをメッセージとしていただきました。あの未曾有の災害のなかで感じた抗えない自然の猛威に対する無力と、その異常な現実のなかで死者を弔い、ご遺族の悲嘆に寄り添う者には、いったい何が求められたのか。また、何を教えられ、気づかされたのでしょうか。そこから見える社会的な責任・役割についても確認してまいりたいと存じます。

2011年3月11日から10年。「私たちは忘れない あの日のこと あの人のこと… いまだからこそつながる」を胸に、これからも東日本大震災と原発事故の経験を風化させずに未来へと語り継ぎ、祈りを繋げてまいります。災害に備えることで、同じような悲しみを生まないために……。

公益財団法人 全日本仏教会  
理事長 戸松 義晴

全仏 649 号  
CONTENTS

特集  
東日本大震災10年

～私たちは忘れない あの日のこと あの人のこと… ..... 4  
いまだからこそつながる～

- 【鼎談】  
「私たちは忘れない あの日のこと あの人のこと ～弔いに携わる者として～」  
新倉典生／石井時明／戸松義晴／秋沢淳子
- 被災地からのメッセージ／仏縁者からのエール
- 一般社団法人仙台仏教会主催・東北福祉大学共催／東日本大震災10年慰霊供養

宗教法人運営のための法律入門  
法人の管理運営を円滑にするポイント① ..... 11

自死とグリーフケアを考える〈第2回〉 ..... 12

星光照／臨床仏教師

本会からの報告 ..... 16

- ・第34期第1回国際交流審議会開催
- ・第34期第3回社会・人権審議会開催
- ・第34期第4回社会・人権審議会開催
- ・「救援基金」寄附者一覧
- ・「賛助会員」新規入会者一覧

法話 ぶっぼうそう  
コロナよりも怖いのは自分だった? ..... 18  
江田 智昭／仏教伝道協会

表紙絵 .....



人の想いや希望が龍となって昇り、いかずちで暗雲を割るという絵です。ほか、赤い壁は気合やエネルギー、虹色の空は明るい未来というイメージとなっております。

すいいろ

霊獣、神仏、妖怪、動物の作画が得意なイラストレーター。昨今は神社仏閣の授与品イラストを手掛ける。歴史やバックグラウンドを重んじながら表現する。  
HP: <https://www.suiiro.com>



## 鼎談

# 私たちは忘れない

## あの日のこと

## あの人のこと

～串いに携わる者として～



**秋沢** 本日は串いに携わる者として、東日本大震災から10年を経て、この間どのような思いで過ごし、震災から何を学び、気づかされ、これからどのような役割や責任を社会の中で果たしていくのかをお話しいたします。最初に、2011年3月11日14時46分、東日本大震災が起きた時、何をしていた、その時どのように感じられ、その後どのような活動をされたかお話ししたいと思っています。

**戸松** その日は全日本葬祭業協同組合連合会の葬祭コーディネーターの研修会があり、私は当時、全日本仏教会の事務総長で、4時に芝浦の会場まで何うと約束していたので、運転して会場までまいりました。現場に行きましたら、すでに皆さん旧芝離宮恩賜庭園に避難していて、今日はこれ以上できないとなり事務所に戻りました。

暗くなってきて、大変なことが起きたことをテレビ等で知り、情報を収集して全日本仏教会としてどうするかを考えていました。やがて宮城県の塩竈の全日本仏教青年会や浄土宗の青年会の活動をしていた僧侶と連絡が取れました。多くの方が亡くなられている、お寺も被災している、誰が供養するのかということも地域の仏教会で話し合われて、地域の方と顔見知りで動ける僧侶が、宗派に関係なく努力しようと決めたとのことでした。すぐにでも駆けつけて何かしたいという連絡も多く来ていたので、相談したら、混乱の中、知らない人が回向するのは現地の方にとっては難しい。それより普段から顔見知りのお坊さんにお経を上げてもらう方が良さだろうという話でした。

ですから、全日本仏教会は地域の僧侶の串いのサポートに徹する、外から介入してご回向するのは控えてくださいと各加盟団体に連絡しました。一方で、各地の教会、宮城県には仏教会がないので仙台仏教会にすぐに連絡を取り、ネットワークを作り始めました。当時、仏教界はネットワークがあまり強くなかったんです。この日以降、ボランティアネットワークの人たちとか、全葬連、もしくは一般の食品会社とのネットワーク作りに取りかかりました。いろいろな情報をいただきながら、被災地が何を望んでいるのか、宗教者は何ができるのかを的確に把握して支援に向かいたい。それにひと月くらい進捗したというのが当時の状況です。

**石井** 私ども全葬連は、全国組織として唯一の連合会で、各県と緊急災害時の協定を結んでいます。当日すぐに経産省、次の日に厚労省、他にも防衛省、警察庁などから棺を用意するよう要請がありました。東北3県に集めなくてはいけないんですが、どういふ形で持っていくかは難しい状況でした。結果的には棺を5100本、仏衣を6800、ご遺体を入れる納体袋を5000、とりあえずは用意しました。

こういう状況では指示系統が難しいんです。私が行った相馬市では広い廃工場が遺体収容所になっていて、その時点で何千という棺がありました。結果的に相馬市では数百のご遺体だったと記憶していますが、必要などころに必要な数が行っていないかった。初動の整理が非常に重要だと思いました。

2、3日のうちに、どこどこへ応援に行きなさいという指令を本部の方で作って、全国から900名くらいの同業者が各地に入って、ご遺体の収容、納棺のお手伝いをしました。火葬場が被災していて、中には東京までご遺体を持ってきた事例もあります。制約がある中で、どこまでお手伝いできたかは、今考えても及第点は与えられない。しかし、行きたくても緊急車両として登録できなかった

お寺が自然発生的に避難所になっていて、毛布、水、食料等が足りない。そういった場所にそれぞれの宗派が、本山から車を仕立てて向かう時の交通許可証の発行などはお手伝いさせていただきました。

被害が大きくなっていく中で感じていたのは、僧侶、仏教者は何ができるのかということ。するとやはりご回向をサポートしようとなります。仙台市の火葬場は混乱していて葬儀ができる状況ではありませんでした。せめて火葬する時にはということ、自然発生的に仏教だけでない宗教者が協力して、交代で火葬場に詰めて、ご要望のある方にはボランティアでご回向することのサポートもさせていただきました。

一人ひとり亡くなられた方の思い、ご家族の悲しみやくやしや不条理さがあるだろうと、1万6千人とか2万人とか、数で計ってはいけなさと感じたことを覚えております。その時に僧侶は回向するしかないのか、他にできることはないだろうかと感じました。

**新倉** 私は茨城県での用事を済ませて、さあ帰ろうという時に揺れました。普段だと1時間もしないで帰れるのですが、東京に着いたのは夜の11時頃。6時間くらいかかりました。

東京都仏教連合会は長い間、東京都慰霊堂で関東大震災と東京大空襲の慰霊法要をとめてきました。私は事務局長として20年関わってきました。前日の10日も東京大空襲のあった日なので慰霊堂に集まっています。そこに出席していた当時の石原都知事が、僧侶たちが集まる中に来て、「阪神淡路大震災から宗教者が地域社会の復興事業に携わってくれるのは大変心強い。しかし、キリスト教は目立つけれど、仏教の坊さんあまり目立たないね」という話をしていました。私は石原さんに「いや、関東大震災のようなことがあれば、



東京都復興記念館所蔵

阪神淡路での経験を活かして、東京の僧侶も地域貢献に力を出しますよ」と返答しておりました。その翌日が東日本大震災。ですから6時間かけて帰る間じゅう都知事の話が頭に残っていて、これは支援に行きなさいいけないと思っていました。

両国の東京都慰霊堂には20枚ほどの絵と写真が飾られています。関東大震災、東京大空襲からの復興の様子が描かれたものです。その最初に、2人の僧侶が祈りを捧げている姿があります。私たちは長いこと携わっている、90年前の僧侶がいち早く関東大震災の復興、犠牲者の慰霊に力を尽くして、被災者に寄り添ってきた姿を身近に学んでいました。だからこの東日本大震災では我々も支援に行きなさいいけないと。また70年前90年前に東京は全国の人に助けられたわけですから、今度は恩返しをしなきゃいけないと、強く思ったのを思い出します。

団体としては、被災3県の岩手県仏教会、福島県仏

たり、ガソリンがなかったりと、当時はあれができる限りだったとは思いますが。

**秋沢** 当時放送局にいた人間も一週間くらい泊まり込みで、ずっと何が伝えられるだろうか、マスコミとして何ができるだろうか考えた日々でした。

震災から半年後になる2011年11月5日「津波防災の日」に、全日本葬祭業協同組合連合会が主催、全日本仏教会と東京都仏教連合会が後援で、東京の増上寺で「東日本大震災犠牲者合同慰霊祭」を行いました。その経緯はどのようなものだったのでしょうか。



2011年11月5日 東日本大震災犠牲者合同慰霊祭

**石井** 弔いを請け負う人間として、これだけ多くの人が亡くなられた中で、何ができるだろうという声が当時の理事や業界で上がったのです。現地に行けない方のため、業界としてできることは何かを考えて慰霊祭を企画しました。

**新倉** もともと全葬連の松井前会長が、全国から被災地の人を励ましたい、寄り添いたいという話をされてきました。

宗教界は支援活動においてネットワークを作り始めました。しかし行政からの連絡は宗教界に来るわけではなく、葬儀屋さんや一般の企業に行きます。さきほどの

ただ合同慰霊祭に1000人、火葬供養には献花が2000人ぶん集まった。そういった思いは、行政と我々の相互理解が浅い深いではなく、いろいろなものを超えていきます。合同慰霊祭では宗教界と葬儀社、他の団体の人たちが、みんなが思いを一つに被災地にエールを送った。絆なんてよく言いますが、震災はそれを見つめ直す機会になったのではないかと思います。

**秋沢** 東日本大震災から10年が経ちました。それぞれの団体がどのような思いをもって活動してきて、これから何が大切になっていくのか伺おうと思います。

**戸松** 被災地の支援に関して、全日本仏教会は活動主体となることはできませんので、活動しているお寺、仏教系の団体、お檀家の方たちの支援を続けてきました。今も続けていますし、これからも続けます。

当初は物質的な支援がありましたが、仮設住宅に移ると、住むところはあってもみんながバラバラになっていく。あるいは亡くなった方のことを思ったり、自分でだけ生き残ったのかと感ずる中で暮らしている皆さんに私たちができることは、一緒にお茶を飲んで愚痴を聞いたりということだと思います。若い僧侶、地域の僧侶たちが自発的に組織を作って、仮設住宅に行ってお茶会をする。そういったことの支援をいたしました。

行政に向かっても、何か協力できることがあればと働きかけるだけでは不十分で、思いが形になっている事実を伝えることで、少しずつ変わってきました。

2021年1月25日、それまではお経を読んだり供養するのが宗教活動で、災害時に避難所となるための備蓄をしようとしても、宗教活動ではないとして、その場所が課税の対象になったことがありました。し

棺が足りないという情報も全葬連に行き、それを聞いて私たちも動く。そのようなつながりから松井さんの思いを伺って、一緒に被災地の方々にエールを送りたいと、当時、全仏の事務総長の戸松さんに相談したら、理事長さんもみんなで祈りを届けましょうとなり、みんなが後援しながらこの大きな慰霊法要につながりました。大変意義の深く、すごく喜ばれたエールでした。

会是世界仏教徒連盟(WFB)の唯一の地域センターです。私どもが設けている救援基金に、最初に届いたのは3月15日、WFBの本部からでした。世界の仏教徒の思いなので送ってくれた額が大変高額で、驚きました。しかし金額よりも、これだけ思ってくれていることを被災地に伝えたいと、当時お寺で困ったことがあれば、電話でもハガキでも言っていただければ現金書留で10万円をお送りしました。報告は後で良いということを徹底しました。それはひとえに世界中に皆さんを思っている人がいるとお伝えする。それが金額よりも大事だと思っていたからです。

この法要も、東京でやることによって多くの思いを被災地の方々に伝えたいと思って行いました。

**秋沢** 大変な中行われたこの慰霊祭ですけれど、1000名を超える方が弔問にいらしたということで、多くの方が一刻も早く手を合わせに行きたいと思っていたことがよくわかりました。

**新倉** 全葬連と宗教界が一緒にこうした供養ができたのは、ひとえに思いが繋がったからです。行政は、東日本大震災の前、我々宗教者とは一線を置いていました。こういう大きな災害の時には思いがそれを越えていくんです。

先ほど火葬の協力をしたという話がありましたが、あれは石原都知事が被災3県の知事からの要請を受けました。こうした情報も初めは全葬連さんに入ってきました。宗教界はそこから情報をいただいて、そして行政に申し出ていく。初めのうちは宗教者の言うことを行政は聞いてくれませんでした。そういうことが超えなきゃいけない、変わらなきゃいけないことだとこの時考えました。



2011年4月2日 東京都 瑞江斎場にて

そういう中、福島第一原発の事故によって強制的避難や自主避難で関東に大勢いらっしやることがありました。その方たちが供養できる場所がないし、多くの人が行けないので、ご回向する場を作ったらどうだろうという話が全葬連からあり、是非ということで受けました。また、全日本仏教

**石井** 今年で10年ですが、この間、いろいろな災害が日本各地で起こりました。数多くの市町村と我々の業界は、棺、骨壺、納体袋の供給という災害協定を結んでおります。

実際に熊本地震の時も要請が来て、すぐに手当てすることは今でもしております。生きている人たちに納得してもらえようなお見送りの仕方というのが我々の業界に求められていると思いますし、人と人とのつながり、送ることの大切さは伝えていかなくてはいいけないと思います。

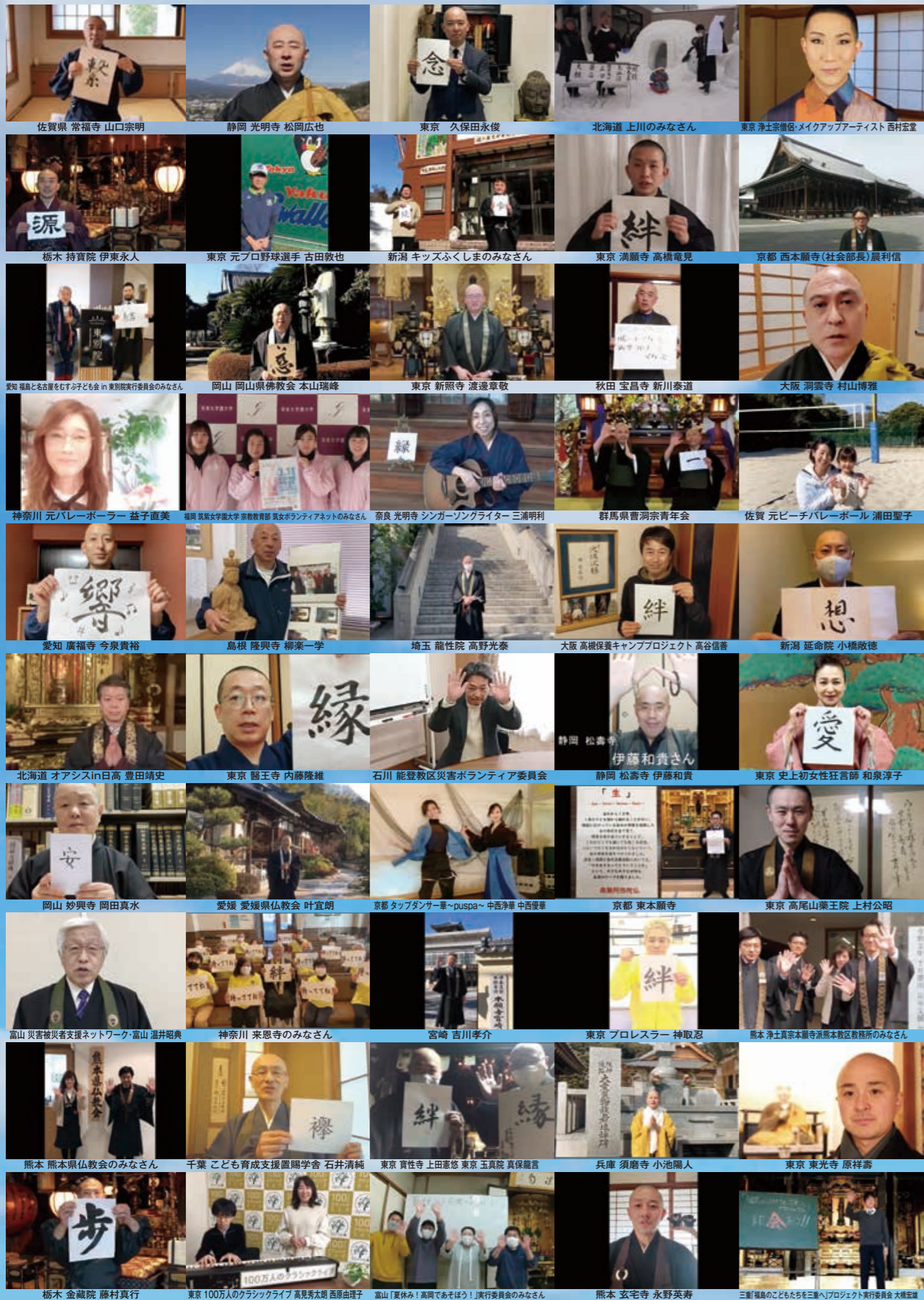
人が亡くなって送る時に宗教者が必要とまだ8割9割の方は思っているんです。多くの方にとってお葬式は宗教者やお寺さんという感覚はまだ日本人の心にあるというのは大切にしていかなくてはならないと思っています。

**秋沢** この東日本大震災から10年を振り返って、そしてこれからのことを伺いましたけど、それぞれの団体が弔いに携わる者として被災地に寄り添う、そんな3月11日となります。被災地に気持ちが届くと思えます。私も含めて日本全国のそれぞれの人がこの時間、震災が起きた時間に黙祷を捧げると思っています。一つにしてこれからの日本を作っていけたらいいなと思います。

本日は皆さんどうもありがとうございました。

この様子は、  
本会のYouTubeチャンネルから  
ご覧いただけます。





東日本大震災から10年、この間、本会とつながりのあった、これだけの方々からメッセージをいただきました。いまだからこその人々の絆です。まとめた2つの動画は、本会のYouTubeチャンネルにてご覧いただくことができます。

被災地からのメッセージ

仏縁者からのエール



# 宗教法人運営のための 法律入門

宗教法人の管理運営 13



## 法人の管理運営を円滑にするポイント①

これまで宗教法人の管理運営の前提となる組織について説明をしてきました。ここではその点を踏まえて法人の管理運営を円滑にする実務上のポイントについて紹介し、参考にしていただきたいと思います。

### <宗教法人の最高意思決定機関は責任役員(会)>

宗教法人の最高意思決定機関は責任役員(会)です。そして、規則で別段の定めがなければ、責任役員の過半数で決まり、各責任役員の議決権は平等とされています(宗教法人法第19条)。

責任役員は通常3名で、うち1人は代表役員、1人は総代といった寺院が多くみられます。寺族から1名といったところもあります。また、氏子が責任役員となる神社や、信者が責任役員となっている教会もあります。

### ●重要な事務決定は会議で

責任役員が行う事務決定は、法律上は会議を開くことは要求されていません。しかし、規則で会議を開くことが定められておれば必ず会議を開かなければなりません。そのような宗教法人は、規模が大きいところに限られています。規則で確認しておいて下さい。責任役員に就任してもらう方は、世間的にも活躍しておられ、多忙の方も多いでしょうから、持ち廻り決議も止むを得ない場合もあるでしょう。

しかし、重要事項については会議を開くことが望まれます。法類や組寺の住職である責任役員の方に毎回出席してもらうのは無理としても、檀信徒や氏子、信者である責任役員は一同に集まるべきでしょう。招集は、規則に別段の定めがなければ、宗教法人の事務を総理する代表役員が行います(宗教法人法第18条)。

### ●他の諮問機関も有効に活用する

ところで責任役員(会)が最高の意思決定機関だからといって、何もかも責任役員(会)だけで決めてしまうというのも上手なやり方とは言えません。

総代(会)に相談すること、そして寺院規則上定めがなくとも多くの法人では世話人制度がありますから、世話人(会)にも相談して意見を出してもらうことも重要です。檀信徒総会や氏子総会、信者総会を開くといったことも場合によっては必要かも知れません。

作成・監修 弁護士 長谷川正浩

# 東日本大震災10年慰霊供養

2021年3月11日。あの日から10年、震災物故者に対して慰霊の誠心を捧げるため、仙台の東北福祉大学において東日本大震災10年慰霊供養が行われました。コロナ禍での感染防止対策に万全を期すためにYouTubeで配信され、多くの方が視聴し、ともにあの日、あの日に思いをはせました。

この東日本大震災10年慰霊供養は、仙台仏教会が主催、共催として東北福祉大学、本会が協賛し、東京都仏教連合会が後援する形で行われました。

仙台仏教会は、この10年間、県の仏教会のない宮城県の中で一地域仏教会として被災した寺院に寄り添いながら、復興に尽くしてきました。今回、曹洞宗を設立母体とする東北福祉大学に協力を申し入れ、大学から快諾をもらったことで実現したこの慰霊供養。被災地の仏教会と大学とが協力して法要を営むのは初めての試みです。

東京都仏教連合会と本会も、震災以来、仙台仏教会とは密に連絡を取り合い、ともに歩んできた中で、少しでも被災地のみなさんにエールを届けたいと、それぞれ後援・協賛しました。

最初は、本会の理事長、戸松義晴から本会の「この10年のあゆみ」として、本会は、震災から4日後に世界仏教徒連盟から送られた義援金をもとに「救援基金」を設け、復興支援に携わる諸団体へ援助を続けてきたこと。それは前ページのようにな多くの「縁」につながり、今に至ること。そして今後も絶えることなく続けることが報告されました。



東北福祉大学



午後2時46分の黙禱

続いて、仙台仏教会の会長、伊達廣三師を導師として慰霊法要が執り行われました。「妙法蓮華經観世音菩薩普門品」が終ると、午後2時46分、あの大地震が発生した時間を迎えます。誰にとっても特別な時間。恐怖、悲しみ、慰霊……：：：：それだけの人がそれぞれの場所それぞれに胸に黙禱を捧げました。

それが終わると、東北福祉大学の学長であり、千葉県市原市にある宝林寺の住職でもある千葉公慈師による講演です。

師はまず、10年目の今だからこそ、復興に終わりはないと私たちが心に刻む大切さを説きます。なぜなら、忘れられているのではないかと被災者が思ってしまうことが、心の復興にとって最も大切なことだからです。「すべてものにとって生命は愛おしい、己が身にひきくらべて他の生命に思いを寄せよ」という釈尊の言葉を引いて、風化を乗り越えながら復興を進める決意を述べます。

そして、今、ここにいて、私に、力強く生きよと言う釈尊の実存的なメッセージを実践する基盤として、信じる心の大切さを説きます。信心こそが明日を生か

る力を湧き出させる仏教の真骨頂であると。では、その信心にはどのようなにたどり着けるのでしょうか。師は言います。み仏の救いという約束に導かれてからこそ信じることができ、安心してこの迷える世界を生きていけるのだと。まさに「阿弥陀経」の名句「諸々の善男子・善女人もし信ずることあらん者は、まさに発願してかの国土に生ずべし」の通りだと言います。「信すれば救われる」ここには論理の飛躍があります。しかし、師はこの混沌の時代だからこそ、仏教を知らない人に対してあえてこの信心を勧めます。人はその道に信じることを諦めてどうして歩んで行けようかと。道元禅師の『正法眼蔵』の「生死の巻」と「発菩提心」を引きながら、宗教とは祈る心とは絶対他力以外のなものでもなく、人生には菩提を求めて純粹に幸せと信心を捨てる道はないと言います。

つまり、信じることは生きることそのものであり、それを根本とする仏教は一人ひとりの人生に結果を求めません。信じることによって自分の未来も開かれていきます。残された私たちは、信じる心を礎として心の復興、人間の復興のために歩み続けることを誓い、師の講演は終わりました。

その後、上記の3人に東京都仏教連合会の新倉典生前事務局長が加わってパネルディスカッションが行われ、10年慰霊供養は終わりを迎えます。

10年というのは仏教の区切りではありませんが、一般的には大きな区切りです。あの日多くの命が失われ、多くの悲しみが生まれたこと。それを誰も自分自身のこととしてもう一度振り返る。意義深い一日となりました。



千葉公慈師

# 自死とグリーフケアを考える 〈第2回〉

## 現在の活動

今、臨床仏教師として、終末期の方の賃貸住宅である「はなみずきの家」というところで週に一回活動をしています。医師、看護師、介護士、薬剤師、ケアマネージャーなどがいて、最期を看取るという施設です。

そこで活動させてもらえるようお願いをしたところ、お医者さんや看護師さんはいますけど、入居者のいわゆるスピリチュアルな部分、私の人生どうだったのかとか、死んだらどうなるのか、という問に対してなかなか答えられないというのが現状だったので、臨床仏教師としての勉強もしているということだから是非お願いしますと、活動を始めさせていただいたのが平成29年のことでした。

また、保護司としても活動しています。

あるいはフードパントリー。パントリーとは食品や飲料を日頃から備蓄する場所のことです。お寺をそのような場所として使って、ひとり親の方たちに食品を提供する活動も始めました。川越子ども応援パントリーという市民団体、そして天台宗の最明寺さんと宗派や団体を超えて一緒にやっています。また、そこに来てくれる人の子どもに、週に一回お寺に来てもらって、学習塾、寺子屋をやっています。



フードパントリーでの様子

僧侶として生老病死の全てに関わっていきたくと考えています。

## 星光照・臨床仏教師

日蓮宗円真教会担任。在家出身で2007年に出家。生老病死の現場で活動をする為に臨床仏教師の資格を取得。現在、終末期専用賃貸住居「はなみずきの家」にて入居者のスピリチュアルケアに従事。また保護司として更生保護の活動、ひとり親家庭支援の為、地域の市民ボランティア団体と協力しフードパントリー、学習支援教室「寺子屋」を開催。



え、タバコも吸わせてもらいます。そうすると今まで病院でご飯を食べられなかった人が、食べられるようになり、体力が付いて元気になるということも多いんです。大井代表は、検査や数値には測ることのできない、人間力がそこにはある。その人間力が回復していく。終末期を迎えた人でも希望や思いは私たちと変わらない。好きなものを食べたい、買いたい物、旅行をしたいなど、その人らしい時間を可能な限り作っていきたくて、今も頑張っています。看護師さん、介護士さんが常駐して医療行為まで行える施設は全国的にも珍しいと聞いています。

## 臨床仏教師とは

平成25年に第一期臨床仏教師養成講座が始まりました。全ての課程を終えるのに2年半くらいかかります。座学、ワークショップ、最後に実践研修が100時間以上、その後最終審査があるんですが、そこで私落ちたんです。しかし、どうしても諦めることができません、2期目を受講し、認定をいただきました。それが平成29年のこと。だから資格を取ってすぐに、はなみずきの家で活動し始めたことになりました。

臨床仏教師は、生老病死の現場に行くことに重きを置いていきますので、生活困窮者の支援とか、高齢者施設での傾聴活動とか、引きこもりの方の集いの場にいらっしやうしている方もいます。

私自身はターミナルケアにかかわろうと思いき、最初は、埼玉近辺で病院をいろいろ探して連絡したんですが、メールが返ってこないこともありましたが、キリスト教系の病院だと、うちはチャプレンがいるからと断わられたりもしました。やはり臨床仏教師と突然言っても、医療関係者からすると何じゃそりやという話だったので、認知されることの難しさをすごく感じましたね。その中ではなみずきの家は話を聞きますとお会いでき、先ほどのように始まったという経緯です。

はなみずきの家は川越と浦和にあって、入居者が訴えを起こした時に看護師さんが判断して私を呼びます。浦和には、ご高齢の方から40代くらい若い方もいらっしやいます。余命宣告を受けた方もいますが、どちらかというと積極的治療を緩和治療に切り替えた方がほとんどです。死を意識されている方が多いですね。はなみずきの家では、その人らしさを第一に考えていて、ステキが食べたいと言われたらステキを出します

し、タバコも吸わせてもらいます。そうすると今まで病院でご飯を食べられなかった人が、食べられるようになり、体力が付いて元気になるということも多いんです。大井代表は、検査や数値には測ることのできない、人間力がそこにはある。その人間力が回復していく。終末期を迎えた人でも希望や思いは私たちと変わらない。好きなものを食べたい、買いたい物、旅行をしたいなど、その人らしい時間を可能な限り作っていきたくて、今も頑張っています。看護師さん、介護士さんが常駐して医療行為まで行える施設は全国的にも珍しいと聞いています。



はなみずきの家

第三者の私が入ることでスタッフの方々に支障がないように心がけています。どの場所でも同じですが、受け入れ先の方々の信頼関係はとても重要です。臨床仏教師の先生から3年活動してやっと信用されると思いきいと言われた事は今でも忘れません。

## 入居者からどんな話が出てくるか

思うのですが、最期というものは人生の縮図なのかなと感じますね。50人いれば50人なりの生き方、亡くなり方があって、何十年も前に亡くなったお母さんに謝りたかったなど懺悔や罪の意識を持たれる方もいますし、私は後どれくらい生きるのか死ぬのが怖いか、思いをストリートに出されることもあります。予後知らされて歩かない若い方などは、まずはリハビリしてここを出て歩

## 傾聴とは

けるようになるんだとか希望を持っている方もいらっしやいます。もちろん余命宣告はした方が自分らしい時間を過ごせるとは思いますが、家族の思いからするとやはり言えないという状況もあり得るんです。グリーフは死別だけではありません。癌で喋ることができなくなった、身体が動かなくなった、親として子どもを抱きしめることができなくなったなど、入居者の方は様々なグリーフを抱えていらっしやります。

私が行くことで家族やスタッフには言えないことを、ぼつりぼつりと話してくれることが多いです。家族に対しては「死にたい」とはやはり言えないですよ。娘さんにいろいろ良くしてもらってありがたく思っているけれど、この痛みに耐えるのは辛く死にたいとは言えないですよ。そういった思いを聞かせていただくというのは多いかなと思いますね。

私はカウンセリングをしているわけではないので、私が思う傾聴とは、対話だと思います。話をしているその瞬間、私が一番近くにいます。その方と同じ目線でお互いの思いに対して自分の気持ちはどう揺らぐのかを大切にしています。自分がどう感じたのか、それを言葉として出していく。それに対して向こうも揺らいでいく。答えは当然ないですし、その方が持っているかもしれない、見つけられないまま終わるかもしれない。その方の思いを紡いでいくというか、言葉にしていけるのが傾聴だと思います。

あとは相手に対して誠実であること、自分に対して素直であること。私も人間なので、聞いていて辛いと思うこともあります。しかし、大切なのはその逃げたいという気持ちに自分が気付いて、それでもそこに居続けるこ

とです。傾聴というと相手の言ったことを繰り返すなどの技術的な点がよく言われますが、その人を目の前にして自分がどうあるか、自分らしい聞き方があると思えます。死を意識している方たちは、こちらが本当の心からの言葉かどうかよく見抜きます。言葉で取り繕おうとすることはやめてしまいがちかもしれませんが、それを感じ取られて、それ以上話が出なくなったりします。ですから自分に素直に、分からない時にはそれを言うべきですし、悲しくなったらその気持ちを出していくことが大切です。

また、聴いているのは私ですが、常に私の後ろには仏さまがいらっしゃる。その仏さまにも聴いて頂く。僧侶としての傾聴はそういう部分もあると思います。

### 保護司・フードパントリーで

それは保護司としても同様のことを気をつけています。罪を犯した人を尊重するのかわられるかもしれないが、もちろん罪を償わなくてはならないのは当然です。けれど、ひとりの人間としてお互いが向き合うと、彼らも心を開いてくれて話をしてくれます。

あるいはフードパントリーでも対話を大事にしています。コロナ禍で、ご飯が食べられなかったり、虐待につながってしまう家庭が増えている現状があります。その中で、ただ食料を渡すだけではなく、私いつも焚き火をやっているんですよ、そこでコーヒー飲みませんかとか言うと、お母さんたちもポツポツと話をします。やり始めは食品をもらって帰るだけのお母さんが多かったんですが、だんだん足を止めていく方も増えてきて、実は主人を亡くしてお骨がまだ家にあるんですけど、といった相談が自然と聞こえるようになってくる。

こつちがオープンでも向こうに信頼されないと、そう

いう話は聞けないというのがよく分かりました。

### コロナ禍において

コロナ禍は終わりがわからないので、皆さんの不安感、思っても口に出せない辛さを感じるが増えました。

例えば、はなみずきの家では家族に迷惑をかけていると思っている方たくさんいます。しかしコロナ禍だと家族も大変なんです。そうすると家族のことも心配だし、でも自分は何もできないという罪悪感のような気持ちもある。となると、なおさら自分の気持ちは言えないです。すよね。そういう声なき声はすごく感じますね。

コロナの最初の頃は、はなみずきの家では家族の面談を15分とか限定してやっていたのですが、緊急事態宣言中の今は、それすらもストップです。ですから、ご家族から届いた手紙を私が読んで、その内容を一緒に深めていく形をとることが多いです。家族と会えなくて寂しいという話は本当に多くなりました。予後が短い方には会っても良いですよということもされています。ただ何かあってはいけないので、スタッフも大井代表も悩まれているところなんです。そういう状況でも私を入れてくれることに感謝しています。

また私は他にも、あるところで電話相談をしています。そういった相談がすごく増えました。つまり、みんな頑張っているんだから自分の気持ちを言えないという相談です。精神的に病を抱えている方で、例えば引きこもりだったんだけど、やっと最近外に出られてデパート行ってきた。でも今コロナでみんな大変だから自分だけ楽しい思いをして良いんでしょか。そういったことを言えないという声はひしひしと感じます。

コロナで先行きが見えないから死にたいという方も

すか。パントリーに高校生が見学に来た時に、お寺でこういうことやっているのを知らなかったし、お寺に入ったら怒られると思っていたようです。世間と我々の見方の違いは当然ありますよね。これからは、お墓はここだけ、相談はここというように、お坊さんが選ばれる時代が来ます。選択肢は向こうという意識は大切かもしれません。「寄り添う」という言葉が今、色々な場所で聞かれるようになりましたが、生老病死の現場において僧侶に必要なものは、目の前にいる方の過去・現在・未来に渡る多くの縁に添う「縁り添う」力。そしてその縁を支える「支縁」の役割が求められていると思います。

のチラシをあるお寺で出したそうです。でも来たり来なかったり。しかしある方から、これを見るだけで心が安心すると言われたそうです。行けないけど、いつでも行って良いんだということだそう。我々は何かやる時、人が来ないとダメ、どうやって来させようかと考えがちでしょう。そうではなく、あるだけで人を安心させることができるんだという発見がありました。宗派の電話相談なども必ずお寺のどこかに貼ってもらおう。そうすると掛けなくてもなんかあったらここがあると安心感があるのだと思います。

そして、どんなにお寺が敷居を低くしても一般の人は一歩二歩下がりがちです。だから、そのお寺のお坊さんの考え方を知ってもらう必要がある。だれも、何考えているか分からない人のところに行かないじゃないで

本会に加盟する宗派や団体では、  
思い悩む人々に僧侶が答える電話相談窓口を  
設けています。

#### 曹洞宗

●心の電話相談室  
03-3454-5420 | 火~金 | 12時~14時

●親世ふぉん(青年僧による電話相談)  
080-1546-7464 | 日曜日のみ | 22時~24時  
080-1547-5646

#### 浄土真宗本願寺派

●「いのちと念仏」相談センター  
075-371-5811 | 月曜日、水曜日 | 12時30分~16時

#### 真宗大谷派

●ココロダイアル  
03-5923-5560 | 金曜日のみ | 10時~21時

#### 浄土宗

●心といのちの電話相談室  
03-3436-6823 | 月曜日、金曜日 | 10時~16時

#### 日蓮宗

●日蓮宗総合相談所  
03-3751-7181 | 月~金 | 9時30分~16時30分

●いのちとこころの電話相談  
075-751-7191 | 無休 | 24時間

#### 真言宗豊山派

●豊山派テレホン相談室  
03-3946-1166 | 火曜日(宗務所休日を除く) | 10時~15時

#### 仏教情報センター

●仏教テレホン相談  
03-3811-7470

月(曹洞宗)	10時~12時 13時~16時
火(浄土真宗)	
水(日蓮宗)	
木(浄土宗)	
金(天台宗、真言宗)	

#### 各宗派有志

●大阪仏教テレホン相談室  
06-6245-5110 | 月~金 | 14時~17時

●全日本仏教会ホームページ  
[http://www.jbf.ne.jp/eventcont/telephone\\_advice](http://www.jbf.ne.jp/eventcont/telephone_advice)



第二十四期 第一回国際交流審議会開催

令和三年二月十八日、本会会議室からオンライン会議を開催しました。木全事務総長より開会の挨拶、戸松理事長より三浦依文、挨拶が行われ、委員を代表して古澤委員へ委嘱状の伝達が行われました。その後、委員の自己紹介を行い、正副委員長を選定について委員間にて互選、古澤理哉委員長、西永亜紀子副委員長が選出されました。続き会議に入り、戸松理事長より古澤委員長へ諮問が手交されました。

理事長諮問

【今期(第二十四期)では、一昨年末より新型コロナウイルス感染症が世界規模で影響を及ぼしている中、各加盟宗派のコロナ禍における海外布教活動の現状を共有し、取り組みを行う中での課題とそれに対する施策についてご審議願います、答申をいただきます。】

また、本会ではWFB世界仏教徒会議日本大会において採択された『2018年東京宣言』を受け、引き続きSDGsの推進に取り組んでいる。現在、各加盟団体における取り組みの中でSDGsの十七項目にあてはまる具体的な活動を共有し、SDGsの推進をしていくうえで仏教界として取り組むべき課題や施策についてご審議願います、答申をいただきます。

をいただきたい」

諮問の詳細については、「コロナ禍における現状と施策については、Withコロナと新しい寺院役割やあり方を探るため、海外布教のみならず、国内寺院活動へも還元できることを期待する。SDGsについては、仏教界として取り組むべき課題や施策について、取り組みへの具現化と加盟団体への周知を答申で示すように」と木全事務総長が要望し、各委員より報告や意見を伺いました。

【第一回国際交流審議会概要】

日 時：令和三年二月十八日(木) 午後一時～  
場 所：全日本仏教会会議室  
オンライン会議  
出席理事：二名  
出席委員：十四名

○進行内容

事務総長挨拶  
理事長挨拶  
委嘱状伝達  
正副委員長選出  
理事長諮問の提示

諮問事項について審議

次回の審議内容についての確認  
○出席者(順不同・敬称略)  
【理事】

【第四回社会・人権審議会概要】

日 時：令和三年一月十三日(水) 午後二時～  
場 所：全日本仏教会会議室  
オンライン会議  
出席理事：一名  
出席委員：九名

○進行内容

理事挨拶  
事務総長挨拶  
提言  
諮問事項について審議  
次回の審議内容についての確認  
○出席者(順不同・敬称略)  
【理事】

【委員】

戸松義晴(浄土宗)  
我孫子高宏(曹洞宗)  
宇野哲哉(浄土真宗本願寺派)  
荷葉一浩(真宗大谷派)  
伴 乃昶(浄土宗)  
佐々木基文(高野山真言宗)  
谷 明生(臨済宗妙心寺派)  
株橋隆真(法華宗(本門流))  
岡田真水(学識経験者)

【アドバイザー】

長谷川正浩(顧問弁護士)  
阿部恭子(NPO法人World Open Heart 理事長)

第三十四期 第四回社会・人権審議会開催

令和三年一月十三日、本会会議室からオンライン会議を開催しました。最初に本郷由美子氏が新たに委員に就任したことが報告されました。阿部恭子氏による提言が行われた後、理事長諮問「死刑制度を問うとき、いのちの尊厳と人権的見地から仏教者はなにをすべきか」について意見を交わし終りました。

戸松義晴(浄土宗)  
小島一雄(真言宗豊山派)  
岡野正純(孝道教団)

古澤理哉(曹洞宗)  
光岡素生(浄土宗)  
佐々木康文(日蓮宗)  
丹羽義寛(高野山真言宗)  
松山大耕(臨済宗妙心寺派)  
奥山元照(天台宗)  
小林政彦(真言宗豊山派)  
久野晃秀(法華宗(本門流))  
長松清潤(本門佛立宗)  
日比野郁皓(学識経験者)  
川橋範子(学識経験者)  
枝木美香(学識経験者)  
西村宏堂(学識経験者)  
西永亜紀子(学識経験者)

第三十四期 第三回社会・人権審議会開催

令和二年十二月十四日、本会会議室からオンライン会議を開催しました。報告事項として、令和二年十一月三十日の理事会において、規程に「審議会議事等に係る委員の情報管理」第十一条として、「審議会の経過や議事等の内容に関して、各委員は良識ある情報管理を行い、メディア(新聞・雑誌等)に、審議会の了承

を得ることなく漏洩しないものとする」を追加したことが伝えられました。また加盟団体推薦委員(天台宗)の変更について、林光俊委員が退任し、柴田真成委員が新たに推薦され就任したことが報告されました。我孫子委員長により議事は進行。本郷由美子氏より「宗教関係者に期待する犯罪被害者支援」当事者のまなざしから」と題した提言があり、その後、理事長諮問「死刑制度を問うとき、いのちの尊厳と人権的見地から仏教者はなにをすべきか」について意見を交わし終りました。

【第三回社会・人権審議会概要】

日 時：令和二年十二月十四日(月) 午後二時～  
場 所：全日本仏教会会議室  
オンライン会議  
出席理事：二名  
出席委員：九名

○進行内容

事務総長挨拶  
理事長挨拶  
報告事項  
提言

諮問事項について審議

次回の審議内容についての確認  
○出席者(順不同・敬称略)  
【理事】

「救済基金」寄附者一覧

二〇二〇(令和二年)十一月一日  
～二〇二二(令和三年)二月二十八日  
(時系列順・敬称略)  
一般社団法人 仙台仏教会  
齊藤清美  
海眼寺  
宮崎市仏教会  
齊藤清美  
郭 瑞蘭  
齊藤清美  
円光寺 勝部英宏  
(示)花蔵院護持会  
齊藤清美  
匿名希望 一件

総計 一六九,〇〇〇円

ご支援、誠にありがとうございました。

賛助会員募集

本会では賛助会員を募集しております。全国の寺院をはじめ、企業や団体、個人としてご入会いただけます。入会等の詳細は本会ウェブサイトをご覧ください。  
http://www.jbfn.jp/about/about\_index/about\_member

「賛助会員」新規入会者一覧

二〇二〇(令和二年)十一月一日  
～二〇二二(令和三年)二月二十八日  
(時系列順・敬称略)  
個人会員  
小田卓也(千葉県)  
石原峰志(愛知県)  
片山大介(参議院議員)  
松井英光(大阪府)  
〈団体会員・営利〉  
株式会社ファーストコレクション  
ご入会、誠にありがとうございました。

訂正とお詫び

本誌2021年1月号(No.648)年賀交換記事に誤りがございましたので、ここに訂正し掲載いたします。  
関係者の皆さま並びに読者の皆さまには、いささかお詫び申し上げます。深くお詫び申し上げます。

28ページ

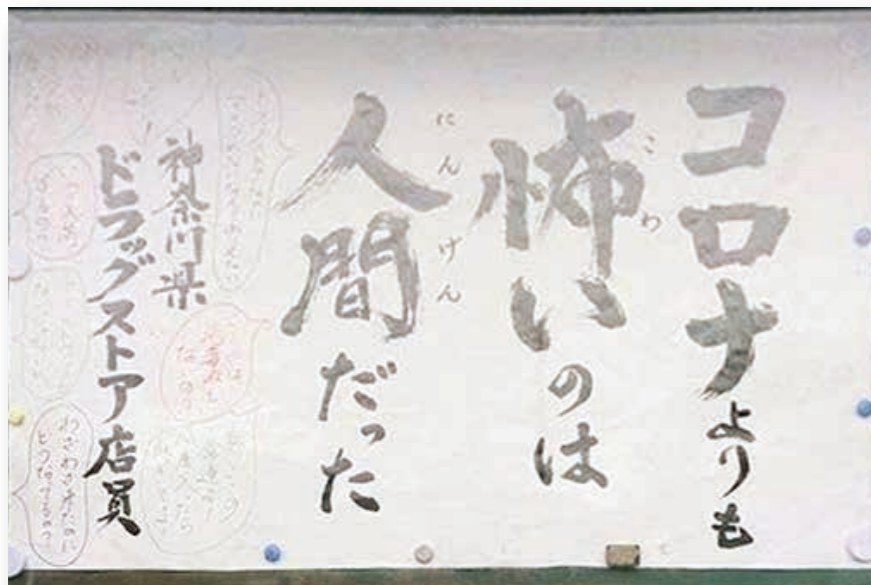
賛助会員

【特別会員】

(誤)信州善光寺若麻績信昭  
(正)信州善光寺若麻績享則

「ぶっぼうそう（仏法僧）」では専門家や大人だけではなく、子どもでも分かりやすい言葉や内容を心がけて、日々の生活に役立ち活かしていける法話を紹介いたします。

## コロナよりも怖いのは自分だった？



(寺院名 浄土真宗本願寺派明導寺 撮影者 azusa0225mike)

私が所属する(公財)仏教伝道協会では「輝け！お寺の掲示板大賞」を2018年より開催しています。この催しは多くのメディア等で取り上げられていますので、ご存知の方も多いのではないのでしょうか？昨年開催された「お寺の掲示板大賞2020」の大賞作品は、浄土真宗本願寺派明導寺の「コロナよりも怖いのは

人間だった 神奈川県ドラッグストア店員」という作品でした。

この掲示板の言葉は2020年2月頃にマスク騒動が起こった際、神奈川県のドラッグストアの店員さんがツイッターでつぶやいたもので、当時ネットニュース等で大きな反響を呼びました。非常時には普段隠されている人間の醜い内面が外に強く表れます。皆が少しでも他者を思いやる気持ちがあれば、このような言葉が話題になることはなかったと思いますが、残念ながらその余裕がなかったのです。余裕をなくした状態。それはある意味、その人間の本性を示したものであるとも言えます。

おそらくこの掲示板の「人間」という言葉を見て、ほとんどの人がドラッグストア等で傍若無人

な振る舞いをする「他人」の姿を瞬時にイメージしたのではないのでしょうか。自分のひどい振る舞いには気づかなくても、他人のひどい振る舞いは非常によく見えます。自分も「人間」のはずですが、勝手に自分自身をそこから除外し、多くの人が無意識に「コロナよりも怖いのは他人だった」と心の中で読み替えてしまうのです。

中国の善導大師は『観経疏』の中で「お経は鏡のようなものである」と説かれています。仏様の教えは鏡の働きをして、自分自身の本性を容赦なくあぶりだします。テレビやインターネット等で非常に多くの情報を蓄えている私たちの外見はいかにも賢そうです。しかし、心の内面はどのようになっているのでしょうか？

親鸞聖人が著した『愚禿鈔(ぐとくしょう)』の中には「愚禿が心は、内は愚にして外は賢なり」という言葉が出てきます。これは「愚禿と名乗る私の心の内面は愚かでありながら、外見は賢く振る舞って生きている」という意味です。この言葉から親鸞聖人は仏教という鏡を通して心の中の愚かな部分を強く見つめていたことが分かります。

浄土真宗の信仰が篤い妙好人(みょうこうにん)と呼ばれる人の中に、浅原才市(1850~1932)という方がいました。ある有名な画家が、晩年の浅原才市さんの肖像画を描いた際、才市さんは出来上がった作品を目にして、「こんな立派な肖像画は私ではない」と言い放ったそうです。

その肖像画は現存していますが、頭に2本のツノが生えています。なぜこのようになったかという、「頭に鬼のツノを描いてください。人の心を突き刺し、他人を傷つけてしまう恐ろしいツノです」と才市さんが画家に強く言ったからだそうです。

付け加えられたツノ付きの肖像画を見て、才市さんは大変満足げだった、と伝わります。おそらく才市さんは、仏教の教えに深く触れる中で、他者を平気で傷つける愚かで醜い姿が自分自身の本当の姿(本性)であるということを強く自覚していたのでしょう。このように仏教を深く味わうことは外面の賢さを得ることにつながるのではなく、内面の愚かさ気づくことにつながっていくのです。

私たちは誰も心の奥底に怖ろしい煩惱を持ち合わせています。他人の醜い本性や振る舞いを嘆く前に、仏教を通して「コロナよりも怖いのは自分だった」と気づくことが大切ではないのでしょうか。

### プロフィール 江田智昭 (エダ トモアキ)

浄土真宗本願寺派僧侶(布教使)。公益財団法人仏教伝道協会に勤務し、「輝け！お寺の掲示板大賞」の企画・運営を行っている。著書『お寺の掲示板』(新潮社2019年)。

